生体腎移植手術を見学して感じたこと

生命科学科一年　西田希望

先日は、手術の様子を実際に見学させて頂き本当にありがとうございました。私は生命科学科の学生なので、臨床の方に進むことはないのですが、貴重な経験になりました。今まで、手術を実際に見たことはありませんでしたし、私自身も手術を経験したことがなかったので、実際の手術の現場はどのようなものなのかと、前日からわくわく（不謹慎だとは思いますが）していました。手術室に入る前に手術室専用の服に着替えたときは、身が引き締まる思いがしました。マスクをしたときは少し息苦しく感じ、手術の場に行くのだと改めて自覚しました。今回の手術は、生体腎移植ということで、まずドナーの方からの腎臓摘出手術を見学させてもらいました。まず、気付いたことは、手術室が明るく綺麗で、モニター装置をはじめいろいろな機械がおいてあることでした。また、手術室には、たくさんの先生方と看護師の方がいらっしゃって、多くの方が協力してこの手術が成り立っているのだと感じました。手術している様子を実際に見ても最初は、手術している部分以外は全部隠されていることもあってか、どういう状況なのか理解できませんでした。ただ、ドナーの方の腹の中を見ていると、ああこれが人間の体なのか、と少し感動しました。手術の前は、気持ち悪くなってしまうのではないかと心配していたのですが、思ったほどそういうこともなくて安心しました。杉谷先生から、この手術の説明をしていただいてからは、手術の状況が少しつかめて、多少は違った目で手術を見学することができたと思います。手術の難易度が上がっても、ドナーの方にすこしでも機能が高いほうの腎臓を残すこと、ほとんどの場合は内視鏡下手術ですむのでドナーの方は早く回復できること、ただそれが難しいと判断された場合は無理をせず、開腹して腎臓を摘出すること、など貴重なことを知ることができました。また、ドナーがレシピエントの肉親であることを確認するために免許証や戸籍を確認することや、事前にドナーに対して精神科医により本当に腎臓を提供する意思があるのかを確かめること、もちろんドナーの方が健康な方であると確認すること、など、ドナーの方の健康と意思を一番に考えて移植医療がなされているというお話は、興味深く聞きました。先生の説明を伺ったあと、実際に開腹して腎臓を摘出するとなったときは、びっくりしましたが、これが実際の手術なのだと実感しました。開腹手術に至った経緯を先生からお聞きして、手術はその場で臨機応変に対応しなければならないことがわかりました。そして、実際にドナーの方から摘出された腎臓を見たときはとても感動しました。生体から移植される腎臓には、ドナーの方の意思がつまっているという点で、献腎移植とは違う、という先生のお話は、印象に残っています。移植医療では、倫理的な問題を避けては通れないことだと理解しました。そして、医療に関わる研究をする場合、倫理的な側面を常に考慮することが必須であると感じました。このことは生命科学科の学生として忘れてはならないと思います。さて、摘出された腎臓の血管を縫いつけてい

る様子を見ましたが、手先が器用でないとこれは無理だと思い、圧倒されました。
　そして、レシピエントの方への移植手術ですが、もともとあった二つの腎臓は残しておいて、ドナーから摘出した腎臓を移植するということで、聞いたことがない話でしたので、驚きました。残念ながら、私たちは、後の予定の関係で手術室を五時に退出したため、腎臓から尿が出てくることを確認するところまでを見ることはできなかったのですが、本当に貴重な時間を過ごさせていただきました。
八時間立ち続けて腰が痛くなり、空腹もおぼえ、この間ずっと手術をしていらっしゃった先生のすごさと自分の体力と気力のなさを実感しました。そして、自分の知識不足も感じ、もっと予習してくるべきだったとも思いました。手術の場を、先生のご好意で見学させていただき、非常に感謝しています。この経験を今後につなげたいと思います。